



洪園茶要卷



天



門口七18
學
卷

根
本
氏
藏

淇園答要卷之上目錄

岡
氏
藏

皆川淇園著

一 學向と何の爲に致しん 二 旧例旧格の本の事

三 旧例旧格の人材とは言辭 四 俗智俗才と有用の才とをす

五 学文致させうの復 六 詩經の事

七 禮の事 八 樂の事

九 書經の事 十 春秋の事

十一 周礼の事 十二 論語の事

十三 孟子の事 十四 老莊の書の事

十五 佛家の説の復 十六 禅学の事

岡
氏
藏

皆
川
淇
園

著

- 十七 心学家の事
- 十八 文章の習古の事
- 十九 詩作の習古の事
- 二十 教諭の八難の事
- 廿一 学文用ひうこの事
- 廿二 士と試る事
- 廿三 学校の設け方の事
- 廿四 教と役けい心得の事

目錄終



比川淇園著

淇園答要卷之上

比川淇園著

一 学文と中事 運用の物の極も思ふ所の為と学文は
 彼は事入り^りの^りと其^り得と中を以極も其^り試^り家^り惟
 成程一色りの料管する事学文を^り入用^り極も^り見
 得^り中の物^りの^り難^りの^り物^りを^り学文^りを^り中^り人^りたる^り道^り試^り知
 事^り是^りよ^りよ^りさ^りま^りは^り出^り来^り不^り中^りの^り運用^りと^りの^り難^り中の^り若^り
 政事の為と運用する事と^りの^り事^りよ^りの^り孔子の門人
 子路の^り終^り有^り民人^り焉^り有^り社稷^り嗚^り何^り必^り讀書^り然後^り為^り
 学と^り不^り即^り此^り焉^りを^り同^り一^り之^りよ^りの^り子路の^り之^り人^りと^り用^り立

者も仕立んとすまよ政とせむ設て入てて朝夕も
見習せし得て学文の末る小童人とおれ遠く現る小
治^治たる民人の元極の事有社稷の守りの元極事何
り見波小付く自然も其元極めく一切者はくへき
まらるも何故も孔子の教も書成徳ては小学と
名付て修むまの徳との為る孔子の師言も是故
悪吏佞者と云然り世世善の言も是の如く書と徳
て後小学と名付るは別像も何れす世小佞者と
まらる何れも世世の年説利口と以て何れもも南
座中の形ひある事よしては志有也と惡きて

学はするそとこそは学文とすまは民人を治むる
は世も治めゆと定りたる乃と社稷を守り終
めはま定まりたる道とすまをあるの令許の如
其人の物中も徳理立を中者こそま徳理立中
まぬか肉も唯^唯そ執廻りの押方斗と定ては何れも
も南有くの如く世も成ては中世の而に害と生ま
る事故も志^志と惡て学文とはさする事と云然
りるあり是と以て学文の入門の事お係りすと
存ひるは世の

二 前書も中を以て学文入門の事お波し成成りは是也

表るとも、新編の事、先代よりの旧例、旧格、よて
何事も、お海、来、い、取、家中の士、い、字、文、無、令
官、表、極、い、思、百、い、月、以、不、尚、又、此、心得、遠、も、有、い、
云、を、意、中、を、い、極、新、格、中、承、い、是、い、以、の、外、た、る、儀
と、此、好、い、先、出、玉、表、い、在、い、い、旧、例、旧、格、と、中、之、の、無
あ、表、い、好、知、中、い、得、た、何、事、も、往、右、の、例、往、右、の、格
よ、て、天、朝、の、旧、例、又、無、總、倉、或、い、是、利、の、儀、法、不
い、中、法、さ、く、起、理、と、い、お、よ、て、の、有、之、い、右、者、
天、朝、以、下、の、例、格、無、大、抵、皆、ま、く、（箱上）の、制、い、本、片
き、箱、上、の、制、無、皆、ま、く、（古）聖、人、の、礼、制、い、本、付、た、る

物、事、の、趣、い、と、此、好、い、故、無、古、聖、人、の、礼、制、い、本、片、
ふ、中、以、て、い、何、事、も、仍、（玉）色、節、さ、志、い、（西）禮、い、（左）右、を、
ゆく、持、量、往、い、（弟）子、（西）禮、い、君、た、極、い、も、い、（其）本、片、
此、と、る、大、本、い、立、之、（玉）と、く、（其）大、道、と、念、忘、不、改、旧、例
旧、格、さ、く、（無）用、（立）中、官、表、い、名、矣、礼、事、玉、表、（徳）
役、人、中、次、方、い、（總）統、さ、り、人、の、こ、い、お、成、り、（此）地、下、（清）願
分、の、風、俗、治、事、い、（惣）表、お、成、中、い、（世）終、い、（お）海、い、（極）い、（心）得、
心、得、（此）好、い、（り）無、（障）い、（を）と、り、て、（中）い、（以）、（脾）腎、の、虚
損、い、（る）り、（付）た、る、病、人、い、是、（玉）病、を、（け）は、と、て
善、良、生、も、（甘）す、（菓）も、（飲）じ、（ま）い、と、思、（い）、（日）あ、（ま）を、（殊）

子魯の先ある事の見えぬと申うける可
有は産は言けなくと由考は度著と成は
るる産は

三 旧例曰格よてたの之喪祭の事も云之役人ホもね
意は産は言けなくと由考は度著と成は
由考は度著と成は
たの之意あるはるる喪するはるるとの思
ふ格は産は言けなくと由考は度著と成は
由考は度著と成は
由考は度著と成は

智俗よて社稷の大才をばりて帝勿論民人
の取扱も皆之不業同よて其上若愚と凡人のこ
そ人と指付中は事事を必まはたせよても
能りは均た何事も動煩ふ斜は云るの時多高
人の如く民と別く由玉の府庫と充て務中業
用の之點ニヤカシく權つて物を矯り媚溜やするの功者
よ由産は言けなくと由考は度著と成は
得とも孔子に所謂僂者と申者よて早竟害不
成中そのよ由産は言けなくと由考は度著と成は
と稱する士ハ利は小見つて其実ハ何の用よも

と致候は予有之は叔詩と申扱ハ一篇と因ハ
何事もも是分る事ハ章ノ之を次章よりうけ次章
の之と又次章より出て篇と成るは詩と
若付中に扱る所ハ書録も詩言志と言り
志と多分の之を別を所字を何よりを
も世道とは一つ心を思ひて世道よりしてはき
て又次の之をひらり行と志とを詩の中
小取らる右の志とを何よりを取られ小
言志と言ひらる物あり扱天の道終一陰一陽と
ありて扱さて行とるものと道をとる事

よて始の緒と絶として終として行事何道
は何道は天の道の根あり扱る物あり扱終の心扱
あり扱として之婦の情あり扱婦の情あり
道徳の事よりは道徳の情を知る事とを
是りけ不と易も多天下何思何慮一致途同歸途
而百慮とを一り是とハ中庸も君子之道造端乎
夫婦及其至也祭乎天地とを一り即ち周南関
雉之管扇の窈窕淑女君子好逑とを一り遠揚の而あり
夫婦の情の或多言と絶とを以て怨と或ハ絶と
と事と扱とるを以て其道徳の外も扱とる民

と誘導して道徳に入らしむる多玉風よりお繼
の道とみて家人の常朋友の道又多田獵祭祀
農業るとよ小せて教たる多小雅より大雅の
全要と掲ぎて天人の間よ通し及して喻し示
したる多頌頌より其事多極より変多こと
もはまる多不多支と多處て孝悌忠信仁義乃
純よ改まる極よ何みてあへらしたる物ある多小
侍と學ひて熟す多其人情の變の極よある
とは月夜して多正安道一立入らむくはる不の
即ち人道の義の立は不あり故小孔子の詩詞よ

も詩可以言興可以觀可以群可以怨述之可以事父遠遠之可以
事君と多依の物右と人道の義の立不決定ありた
る多あるの法規とあるもの多詩三百篇と暗誦
志する士多政事の執扱も用よたち使者を勸
多啓ても文答も作略出多其の事多右
の詩の多ひわく多思安多其益見えざる多小
誦詩三百後之改以政不達使四方不能專對雖多亦美美
以為と多ひ終一り詩の多ひ方を如多よして如極
よ多依付ひり多諸士用立の者出多可中ひ多保ひり
よ多産の志の多己多小ヤたる如く詩經の流か

と漢儒の書小序と中物とをたしめて説小序用
よ立事の中宋儒の詩經の説小序とくぬと中
とて是亦小序の説小彷彿たる説くは小
是も用立事の中小我詩經新解十五卷次著一
重く又右の方の字本ことぬいて先自詩經二
百訓圍と中假名本の書を板刻致させ中
中漢とと當古考成り詩經の教たる不略おと
うは二の中い

七 立事禮と中事多如何の事は中工は極と極は
る水は總別礼流と中志多凡物の内即大小上下貴

儀遠近親疎の等級と各其節よ中りお和と
ぬ極よとるぬ板多皆礼と稱しは事よは流と對
して各其分よお當る極よ何志らぬ多勿論の
事よて多其人よても其分よ當る極よして分よ
とると礼と稱する事より海世の俗風多上下
の次第多く己と早下志て人をさる敬を向事
と礼とをぬいて其次第の等級と混しは極よ致
し事無礼とやそのと一志よは是多早考の事
士と農とをさうとぬく農よ郷飲酒の礼と穡せ
とるぬよ農は自分から高より早き極るる者とあり

高は財寶と自由よりなる故に士も是を羨みて
心う富人と有り人と次ありく、其教を事と
する事と其思はぬ右の礼の物の内亦大小
上下貴賤を逆祝誄の等殺の何らひの事、
時小南に見ずいも有之は方より取りて作略も
の有之即所謂時の中より取りて是は礼を押
つゝして、物事より其支さる所なる故に冠礼皆
礼一節見礼郷飲酒郷射礼祭礼喪礼亦の事小
亦難士相ましくみあるは扱ふ所より付て礼制と改め
て其礼制の道と學ひ吟味として其教を以て

今日の日用の事よをめて用ゆる故よ志くする物ある
故に小論後にも有子の語に礼之用と云り礼とは
用ると云ふ事よて即礼の意を以て今日の日用小
を先て用ゆる事と云へるもの儀礼とは礼の
經とする事、孔子の諸門人の為に先王の礼
と作略とがらむ是南時の用立根よ教へ給ひたる
物と見得しは礼記よ云ふ亦右の用ゆるよ付て
の作略と記したる事多し、先儀礼ありての後
の作略よて作略多し、有りて用ゆる所より用ゆる
の事有りて可き思はぬ

念樂と云ふ物多し詩と奇ひて其憂戚吟吟必しよる
て律と正し一五音と和する松よして一し一し物
よて君子朝夕は樂を交の和を交て其氣血の正
安而と和を以てして志うも物よ和する事の出
極よ心うけ中為の事やよする物とこの和思ふは古
樂の節奏等拙志若きよりおろ吟味致すは
有えは好む是は志省略ふをい

九 書經と中書經何の用よ立いふと出召新作賦也
以凡人の事と執扱いよ義と利との二つよいさ
ふ中いり利とすまこと民彼也義とすまは民

彼する者之是ハ謀小人の内よても使害と云ふ
何と云は決然其得を其法お分り可中い使害
多てこり慾よ多しにして義也似する事とする
志する者義も似しはりよてさ一民ハ世を悦ひ
共する者ありよして志の義も是は民の心
後知る事なりさまこともて下又ハ一玉の法
礼よあはらうの類よハ小智する者ハ其義の何る
而を初る事能はるはた利のこ知りて事と云
扱ふはハ流心彼一のこくして其事業浮世
の法と云す危くさる事と云ま書經の

凡そ載せたる所と雖も皆聖賢の事業は法
さて大義と明のせる事多し後世の法則と
すつて書ありと可思ふ

十 春秋の書の事は雷法伝記に莊子も春秋經
世先王の法志と有之い何はよも王朝の威權衰
く後齊桓公晉文公のたらしの覇者出く法儀
と卒ひ王も朝貢をやらるるひも諸侯同盟此
玉と申合て其賢吳吳の事と考け愚雜の事と評
つて血互もお助多扱ひてそ好悪と同一と云事
と要と留る所も今の世の火兵卒の中間の有る

かくして其同盟の玉しての礼臣賊子多立そむ
所ある事とある所も孔子作春秋而礼臣賊子
懼と云る所のあり也も我尚名時の中も詳も
載たる所も省略す

十一 周易の書の事は何の爲も設けたる物よていふ
と由尋ね伝記に凡先儒の經説の内よて古来よ
り其義を語り記述する事周易より甚だ
多し其所在に易の體辭傳詩も夫易何為者困物
成勢冒天下之道如斯而已者也と有之い故も易
多し困物成勢と申事も易の入用たるの要も

此其物と云ふハ名の因よ加らばたる物と云ふは
の義よて繫辭傳よ圖而當名と有之ハ名と云
ふ其儀礼ハ百名以上と云ふの名よて文字の事
ハハ文字の名凡一義才も有之ハて各其儀と含
む事不同あるハよあらず稱して其物ともナハ
物是名の本は生くたる不多人言ハ出た
るハ言ハ物と稱して易の家人の卦象傳中
君子以言有物而行者恒とナ事も相見ハ中ハ叙古人參何
ハ言ハ有物と貴ハく又必易と作すく以く
若の物と兼んと欲するあり是多皆何の用ナ立

事式との水尋ハハハ是多凡人道の要多善く
古と徳とナハ在ハ古人の情とナ物多独を碎
もの古聖たはまてて辭ハ又衆名の合ハる所
即ち亂物の其義と舍ハ成る者あるハハ
名物と審ハハ古人の情的ハ見るとハ
る中ハ的ハ見るハ其義との一て疑ハす
其道とぬて迷る事ハ成る事よて易ハ即ち
其名物と審ハる為の用ゆる所のものあるハ
ハ繫辭傳ハ以通天下の志以定天下之業以斷
天下の疑とも有之ハ言ハ名とハ如何して用ハの

由乃よひり言と名よハ必皆其爻象の何れも
其爻象の成まる小^一おある昂ち言名の物と中
ものあり爻象ハ卦象のお合ハ成りて其爻と
作を下の物よて合して成まる物左引別て亦
はるるも出来中ハ伏羲ハ八卦を作りたる一通
りの軍物の為小作れる物よて文王ハ其因物の序
よよとく二十四名^二の物と定めて其象と二十四
とありて文の中ハ其道と定たる物あり古と通
の入りたる所ハ軍物の學通せられハ仁義道德の
徳物と示す事も皆私の性^三とありハ故其

徳として^漢海さる所も皆古聖人の規矩準繩よ合
しふ中ハこれハ易學ハ學者至要の事と可思
百ハ其詳ある事よむ^四にるを野志^五著一^六並ハ易
經秘解易源^七花易學軍物小^八由^九後^{一〇}と^{一一}由^{一二}尋^{一三}可^{一四}法
伝^{一五}試^{一六}比^{一七}つ^{一八}お^{一九}目^{二〇}の^{二一}ま^{二二}の^{二三}中^{二四}に^{二五}依^{二六}精^{二七}微^{二八}と^{二九}有^{三〇}多^{三一}ハ^{三二}左
所^{三三}論^{三四}面^{三五}命^{三六}と^{三七}何^{三八}と^{三九}す^{四〇}比^{四一}て^{四二}ハ^{四三}明^{四四}白^{四五}と^{四六}お^{四七}分^{四八}比^{四九}る^{五〇}事^{五一}也^{五二}
比^{五三}中^{五四}と^{五五}存^{五六}比^{五七}る^{五八}事^{五九}也^{六〇}比^{六一}中^{六二}に^{六三}存^{六四}る^{六五}事^{六六}也^{六七}

十二 論語と中書等如何と扱よ比中色比極元伝試比水
比傳の字の義ハ後世辨傳又ハ章傳とと熟用致
比^一よ^二中^三書^四等^五と^六何^七と^八扱^九よ^{一〇}比^{一一}中^{一二}色^{一三}比^{一四}極^{一五}元^{一六}伝^{一七}試^{一八}比^{一九}水
比^{二〇}傳^{二一}の^{二二}字^{二三}の^{二四}義^{二五}ハ^{二六}後^{二七}世^{二八}辨^{二九}傳^{三〇}又^{三一}ハ^{三二}章^{三三}傳^{三四}と^{三五}と^{三六}熟^{三七}用^{三八}致^{三九}
比^{四〇}よ^{四一}中^{四二}書^{四三}等^{四四}と^{四五}何^{四六}と^{四七}扱^{四八}よ^{四九}比^{五〇}中^{五一}色^{五二}比^{五三}極^{五四}元^{五五}伝^{五六}試^{五七}比^{五八}水

お成の得とも是の論の字の中義より何れは論と
をよむ相事の條理より付きて^そ度^た安^あは是より當り
前の事あり又は其物多^く是^れ程^にの物あるありと云
を論としや孔子の所言より弟子の忠信は此の如
くも一^つ君子の忠信は世の如く何る處一と何
るの語の類と論し集めて總^て人の物事成
る^る扱^りよそれくの物の程位を知^るの便とある
一^つは爲の書あり叔徒門人の孔子より向^むする所の孝
仁又政の類は所^ろち各物より當^られる所の正義と尋
ねたる物ありと可^し思^はる

十三 孟子と中書は如何に成^る物より孔子の旨より叶^はぶ
の中を旨と作^る取^りは孟子の書と近^く來^る聖人の及^ぶ
背^きたる事も有^るは極^に中^者も有^る之^を得^るとも
れは大方の僻^よよて此^の程^に孟子性善と論^を原^に
不^謂はる事^も是^は後の有^る命^に君子不^謂性^と中
而^も裁^合せらる見^ふ中^には^る難^お分^はる^る義^には
以後世と差別^{あり}く一^つ通^じ性^は善^とも^う心
得^はよりして荀子性^惡の說^と出^して^は極^に
り出^る中^には是^は荀子も孟子と知^らる^るの論と
近^くは^る何^れ進^むも養^ふ氣^を四^端擴^充之^を論^{する}といふ

極はとまづ一事の極はとて思ふ

十四 老莊の説は如何致し者かと云作はる水の中
老子と隱者極心術中の志深りして老子莊子
とも皆彼中述ふ術を以て天下王家と治むる
不存して書と著するものも亦極は老子は自ら
知を以て乾徳才を以て事と極は存考は亦
獨に説皆簡に歸し中の名統軍ともする所は
術の^下のぬるを教へ名教とも用ゆるは亦
己を以て言も有り早堯の水中と有りて物の中
さる事といふは聖人の及し引合せ見よ

坤の簡ありて乾の易あり是れ老子の經文と
見えしは莊子の篇内逍遙遊と始として逍遙
遊九萬里登りて^ほ南と圖る事といふは
己の物をささるとるくして保るる下を改と極は
事といひて及し同篇と終りし應帝王といひ
て是と終りしといふも治玉の痛くまといふ
不存しと後世道德といふの家も專ら養生の
事の益を致すこと心得たるは大きある心得遠
と存るは亦極は

十五 佛家の説は何れなるに世に三教一致の説とす

十五 志有之の極也此成以全神三教一致の者よは
て中を以旨註作下承以神字の況を精氏より
出たる物と見え中佛家の況全神の示字ひ
ふ中は成なるをふ中は佛門人の内僧徒も雜来り
比左毎夜注作よ家義承も有之の交交親氏の況を
大小宗と中の若く有之全神自況の内よ齟齬有
之は雜一定の上も真言宗るとも又大宗と中
華叢法善の説とも別極よとる中は物と巨寃
竟の亦己身の成仏を求めて中とあり中元
生滅度と中と中決中は法是も元生と成仏と

十六 禅學と中物を用よ立中は物と中尋能作成承以
是も右中を以通全體ふはゆる有用よ立中は能
用よ立ふ中は能評論よ及ひくくは物と是
も畢竟達磨のよめる冬神光よ安心と示して
よりの宗旨よて己一心と定むる業よ業とるふ中

此天下の物理も独も同一極ある事よて此は
米も一粒よて冬春よみりある事よて此は
は精けたる極ある事有之此一心を定むは
理是よて明らある事よて此は
此何事も精く学して得よ此は
之は精く学ひて得よ此は
得た是は吾聖人の道と冬人ある事よて
と可思ふ

十七 尚今よ有る所の心學家と云ふもの、如何の事の
よ此は此の心學家は是ハ一乃ち三教一致の流よて

誤り前條よ中を以て通の事よ此は
名疇の同よ此は此の後で此は

十八 文章の習古を如何にして中よ此は
取以文章の習古を先助字虚字の義と
く此を習得して其措精微と極む是は自然よ自
の神系の用よ入る事よ此は
万と古書の使用の例よ考へ合せて得よ又文
理と中物と確究致し得る辞句の意方或は減
す極く或は加ふく感或先寸極く或は得
よ此は此の語合意系り中よ此は此の終り略出中

以備^ち復^復文と申すは習中するよりよく以右の考
より先年習文録續習文録と申書と板刻^刻申す
以是より古書古成以上幾遍も申書新成以て
正續より百篇と大極^{ツラ}宙より記程何る極より新成以て
より^まて解の文章の助^まりより可申以也是より
助字と三十二より五十言とより書^文是より是の極
の^文新成以た極より学ひ以得る自然より其^文身合お意の
仁魂出来申以て学^文よ其^文終^文半^文身^文より冬^文見^文一^文可
申其^文深^文を何^文よりも出来可申以初学より韓文
と習ひ押文と習ひ以極申以るより一向^文將^文とる

事より不詮文字の刀出来申以るを体と覺つ
以るより思ひもよ^文ぬ^文り^文と可^文思^文以^文文理^文の事
を^文淇^文園^文文^文決^文と申書^文は^文説^文可^文新^文成^文以

十九 侍作の穆古の事出^文易^文新^文成^文成^文水^文申以是^文色^文文字^文の
刀^文出^文来^文申^文申^文以^文て^文、不^文詮^文平^文仄^文と合^文せ^文文字^文と切^文合^文せ
繼^文り^文合^文せ^文以^文極^文る^文事^文て^文、詩^文よ^文る^文物^文より^文、^文書^文産
以^文五^文七^文絶^文句^文五^文七^文律^文五^文七^文古^文た^文よ^文合^文篇^文の^文持^文合^文と^文亦^文一
小^文吟^文味^文を^文新^文成^文以^文一^文句^文より^文、^文難^文也^文以^文て^文も^文詩^文より^文、^文
其^文之^文板^文合^文篇^文の^文持^文合^文の^文之^文味^文を^文以^文て^文、^文其^文之^文文字^文の
其^文於^文も^文當^文り^文る^文く^文以^文志^文り^文、初^文也^文の^文因^文も^文合^文篇^文の

意味を物中より持うべくは其出来申間爰に侍
多小技技よては得た是は以て神祇骨と称す申はる
を成物致し申事と云はれは

二 教と云ふ事如何極よ致して其教の是を申す
申すを以極に終下承は徳士よ教の是を以極よ
致し申すまで先八つの難有といつよを是を学文
の教もあく漸来りしに而候よ学文を以て教一
導と云はる申用事極何事も存し申是を
一難と致し申二つよハ世祿の家是三代と稱する
内よ其生質質極よの賢知愚不肖有之し而何

是より先代の親類と云ふ事申す申す時其難よ
て子孫お續致し来りしに其父母と云ふ者の心先其
格別賢智とある事申す申す世間並に親類
と守りし申す出来し由を以て家祿のお續承
せしあしと存してお成し給する事申す申す
衆を以しよ存し其学文法用と存し是を二難
と致し申す二つよ其傍輩の同学文と致し其
審くて文盲成者多きくは其学文と致し者試申
て其志忍みて申間よ入色ふ申す申す困り入
りて志有る者も学文とお止し其を三難と

彼中の四は武士の家より生れ出てて武藝を
入用の物とせしむる世間一流の風俗より出でし
比成若輩の者弓馬剣槍の稽古より修めし
文と彼中の所傳は是と曰難と彼中の五は
は徳士の学文とせしむる先四書六經の素養を
愈し彼をせしむる大素養の士は是より修め
文音より其之の好む書より修めし用とせしむ
る世中の其の上強て彼をせしむる稽古の稽古
て是の所傳書のに其の似と彼をせしむる心と用
修めし者多く多し其の上の所と吟味しし度

伎倆の講

志有るは志も其師とる人の伎倆接新切り止
り比成書^{つる}子^{つる}上ヶ振^{つる}之^{つる}の粗^{つる}末^{つる}と修業彼比者も儒
業の家より修めし比成早業屠龍の法と成中^伎
比成其の所と家初より見切りて止り者多く比成
是と曰難と彼中の六は素養書より詩文章
と心の其の志風流とせしむる紀り晋人の放
達と其の比成流俗より混中比と修めて世間の
其の修めしものたる修者有る人の就する者我子
の存し極しお成し事と修めし中比て学文彼をせ
しむる比成と曰難と彼中の七は其の得し

先是亦と病因と波の事、西座の右と病因と尚
り此業う一と死利よ入ふ中にて、西論学文ハ雜出
来ハ左教の事、是中官教と此好の事、西座の
正一前書よ中を以学教雜法ハ雜の事、尚又追て此
考もの此教思良よ此座の由就右講新と此波ふ
中にてハ此何根成事と以く教と波、この就ハ此
尋死仰就ハ此取ハ講新と廢ハ此よてハ此ハ此
学文と波、せハ此合解の強、之早竟人、道とる、西
よよりて君子の道と知り、弟、早の決断是非
善惡と別、此ハ此偏私の思、ひらく、公、早の道

理と兼、一志、この時宜、よ叶ハ此根よお成、此ハ此是と
学文の成、就と波、此事よて右の如、一至此事、公書と
徳古聖人の道義と極め、ふ中にて、此師法、ある、此
て雜判、此ハ此書と讀、よ智、事、よ此座、此早竟
と此書と讀、事、此之、此ハ此知、こ、二、此出、此ハ此
是、よて、お海、福の事、よて、此座、此、於、又、此、此の、事
とた、と、一、と、取、て、中、此、得、去、学、文、よ、よ、此、此、一、て、右
の、此、一、此、と、よ、此、る、此、野、菜、根、食、よ、て、貴、密、と
郷、會、意、路、ん、と、よ、此、る、う、如、く、よ、て、此、論、此、事、よ、て、ハ
出、来、ふ、中、此、ハ、此、聖、賢、の、經、書、と、引、付、て、文、義、裁、決

の者其日限とは其試して合語とさす處を人教
とよせて中波布並事ありさて郊の學よて
合語さへるよ是非よ其語よあて賢きたる者と
とり方何ると欲めて引何事とせざるよ
る事る類う其語のふよ或る徳の事よ明ら
うあると以てを中習るも何里或ハ事の取扱
うと試よくま魚を以て奉海を何り或ハ言
語のえトウこのよきと以て拘るも何る事よて遠
中の類の曲藝よてもけ合語の試何る事あり何
也も皆を試はまは浮の悲^點陟よ遠礼何る事あり

極子と極をよせて又終ると待しめて叔又以前の
語と今一應^今正して見るに右の二科の内よて
よても何らる事有は其位ホとをむるよ事次
也と以てして是とは郊人と名付け玉學よ
入して天子の為小爵と上尊よ取の事と爵せ
しむるとそ中^事人試るの法大略是よ法を
ての立のく何る處ら事よ存は事此座は何
よても世合後よて取上りの法何きは學文ハ自
然精と入く其用よ立は極よある事よあるべ
き事^必是又心^必然の智と存はる事此座は

治玉の爲に成りふ中に思ふに先王風と
西にふりて多岐の農工高決して俗を改め
中身安んは小民等と見做ひ中志よてい
友士の性根と高人目前の物に致糸いては志の士
に成りふ中に成りては教誨の届する安ん士
と教へ中は法に孝悌忠信の道理の心得方とは
つらや成せ人よ書写させいて後日其通りと
宙よ中る留ん事よは度いはい玉君世子玉中大
縁の家^男の骨子よは急夜世通りとお勅ふ中に
ては出来する安ん叔其宙よ中述は孰の通達

不通達の所をお成し通達の士に学序とを免
の中心に如世に致しゆを自然に讀書を廢しふ
中心に成りては成りる中に成りては通達の上
よて孝悌の道理といて様々^同和と設り其
変通の御と成し御出申し士も即先有用
る河とあり中たる事よいゆを選挙の有之い
又是法と玉中邑も一時も成り大徳成致し
士と巻一様一成せこの中に農工の内よても死徒
出申御さ付しそのおる引奉る中に是成り士
大吏の家の嫡子次男よも成りて付けは為る

天子天も是時よりありて、殷の其王命と保
てる所と信じて、彼他の念なく、高の其世
も、實に其百姓大族の官に在る者及び王
の家人、皆徳義を秉りて、王に憂恤を施
さる所と仰うり、よろしく事あるに、百姓未だ
如斯き色は刻刻や、小臣、藩屏、侯甸のをく、王
に朝する人、は、そく、其礼の制す
る所、も、あつて、ひいて、惟惟礼と勤むるの徳徳と称
して、各是を以て、殷の辟王と又又せんと欲せり
故よて、下同徳同よて、上下の心符と合せしむる如く

有りたりと云ふ事あり、是より見て、見
る殷の時、は、小民と云ふ、其徳を信じて
上の人とは、こゝろ、たゞ、以て、多し、を、先よく、務
んと、心、裁裁り、と、見え、中、は、是、は、尚書、の、酒誥
の、篇、も、其、事、お、見、ゆ、は、尚、文、長、き、故
に、省、略、致、し、ゆ、は、何、れ、も、殷、の、時、を、右、の、如
く、上、より、教、へ、学、び、せ、し、む、所、も、たゞ、一、種、り、て
小民も、道德、も、修、め、る、は、こゝろ、身、分、の、任、の、事
の、極、も、思、ひ、入、り、有、り、し、と、是、今、の、こゝろ王
人、多、し、民、とは、あ、げ、り、あ、ひ、ら、ひ、く、至、道、と

伸る習ふ事あり下民を皆く包み忍ぶる志
とのこ思ひ直道有りて威権を以て伸
て抱と云ふ世ぬ仕方ある所下たる志一人も
を立し及し志正なるの有りするは其
君上する人の第一の心術ありされハ教試
施すすの世話と申や死を以ても必く民を
忍ぶる所ハ教養と申極ある所ハ一
有る習ふ所思ふ其月も志有りて振る所の
所とは世務とやきて唯ひ確たるありと
思ふ所極く其く以てハ家初自く其身を

棄て民心も月も省みて善と求むる事
くして忍ぶると思成るとは作す善の
事ありと云ふも心術と云ふ付て善を
之道も後ある事ありまゝ事として教
育は其大書の心術と云ふ所は其序
中を以て能く此勅命此中う其教の

淇園答要卷之上終

